

[研究論文]

「くれる」の求心性動詞化：*give* との対照研究

森 英 樹

1. はじめに

英語で *give* が用いられる文脈で、日本語では状況に応じて「やる」と「くれる」を使い分けなければならないということは、日本語と英語における認識の在り方の違いを探る上で、重要な研究テーマである（大江 1975；久野 1978；など）。

- (1) a. He gave her a book.
 b. He gave me a book.
- (2) a. 彼が彼女に本をやった。
 b. *彼が私に本をやった¹⁾。
- (3) a. *彼が彼女に本をくれた。
 b. 彼が（私に）本をくれた。

上の例で言えば、英語では、「本」の受け手が誰であっても *give* が使えるのに対し、日本語では、受け手が1人称（話し手）以外のときは「やる」、1人称（あるいは、家族などの話し手側の人）のときは「くれる」となる。(2b) のように受け手が1人称であるのに「やる」を用いたり、(3a) のように1人称以外の受け手に「くれる」を用いたりすることはできない。

本論文では、日英語を対照させながら、授与動詞「くれる」と「やる」の対立が生じた背景を探る。歴史的に見ると、「くれる」には上述の区別はなかったが、中世末期から1人称への授与を表す動詞に特化、すなわち求心的方向を表す求心性動詞としての変遷を遂げたことが知られている（古川 1995；日高 2011；など）。本研究では、この「くれる」の求心性動詞化は、それより以前に求心性動詞化していた移動動詞「来る」の他、「くれる」が感謝の感情をコード化するという意味で、主観的表現である感情述語としての特徴も反映していることに注目する。この考え方に沿って、英語の *give* が授与行為による対象物の移動のみをコード化するのに対し、日本語の「くれる」は話し手への対象物の移動とそれに随伴する恩恵（感謝の感

受付日 2014.10.29

受理日 2014.12.16

所 属 学術教養センター

[研究論文]

「くれる」の求心性動詞化：*give* との対照研究

森 英 樹

1. はじめに

英語で *give* が用いられる文脈で、日本語では状況に応じて「やる」と「くれる」を使い分けなければならないということは、日本語と英語における認識の在り方の違いを探る上で、重要な研究テーマである（大江 1975；久野 1978；など）。

- (1) a. He gave her a book.
 b. He gave me a book.
- (2) a. 彼が彼女に本をやった。
 b. *彼が私に本をやった¹⁾。
- (3) a. *彼が彼女に本をくれた。
 b. 彼が（私に）本をくれた。

上の例で言えば、英語では、「本」の受け手が誰であっても *give* が使えるのに対し、日本語では、受け手が1人称（話し手）以外のときは「やる」、1人称（あるいは、家族などの話し手側の人）のときは「くれる」となる。(2b) のように受け手が1人称であるのに「やる」を用いたり、(3a) のように1人称以外の受け手に「くれる」を用いたりすることはできない。

本論文では、日英語を対照させながら、授与動詞「くれる」と「やる」の対立が生じた背景を探る。歴史的に見ると、「くれる」には上述の区別はなかったが、中世末期から1人称への授与を表す動詞に特化、すなわち求心的方向を表す求心性動詞としての変遷を遂げたことが知られている（古川 1995；日高 2011；など）。本研究では、この「くれる」の求心性動詞化は、それより以前に求心性動詞化していた移動動詞「来る」の他、「くれる」が感謝の感情をコード化するという意味で、主観的表現である感情述語としての特徴も反映していることに注目する。この考え方に沿って、英語の *give* が授与行為による対象物の移動のみをコード化するのに対し、日本語の「くれる」は話し手への対象物の移動とそれに随伴する恩恵（感謝の感

受付日 2014.10.29

受理日 2014.12.16

所 属 学術教養センター

情)もコード化するという違いを浮き彫りにし、授与動詞の分析を通して、恩恵に対する日本語・日本文化特有の価値・思考体系に言語学的に迫る。

以下の構成は次の通りである。次節は先行研究を紹介しつつ、「くれる」と「やる」の分化の動機がどのように考えられてきたかを整理する。3節では、「くれる」を移動動詞や感情述語と比較対照させながら各表現の特徴の異同を整理する。具体的には、移動動詞「来る」の持つ求心的方向性と感情述語の特徴である主観的明証性の双方向から「くれる」のコード化を考察した上で、*give* と対照させる。4節では、本研究に関連する分野として、「くれる」に関わる歴史的な側面と社会文化的な側面を論じる。5節は本論文の結論と今後の展望を述べる。

2. 先行研究

本節では、授与動詞における「くれる」に関連する先行研究を確認するため、認知言語学の立場からの研究と語用論的な観点からの考察を取り上げる。これらの研究の背景にあるのは大江(1975)や久野(1978)である。大江(1975)は、日本語体系には敬語など主観的感情が浸透しており、このことが、授受動詞「やる」「くれる」「もらう」の主観性の動機であるとする。久野(1978)は、文中の指示対象に対する話し手の自己同一化を共感とした上で、視点制約の観点から、「くれる」は、話し手の視点が主語ではなく与格目的語寄りのときのみ用いられ、「やる」は、話し手の視点が主語寄りか中立のときのみ用いられる、と一般化した。こうした話し手を基盤とした説明の試みは、以下に取り上げる理論的研究の土台となっている。

池上(2007:301-310)は、日本語における1人称表現の特権的な扱いとして、「くれる」の用法を取り上げ、受け手が1人称に限られる「くれる」とそれ以外の「やる」の違いを、日本語に見られる1人称中心、2/3人称非中心という捉え方の例として紹介している。本論文にとって重要なのは、移動動詞や感情述語の主観的把握表現の考察の中で授与動詞の例が紹介され、主観的把握という観点から、授与動詞が移動動詞や感情述語と関連づけられている点である。また、池上(2006:173-174)では、「くれる」の補助動詞の用法「てくれる」(例えば、「本を買ってくれる」)について、本来であれば授受の対象となるモノ(「本」)の代わりにコト(「本を買ってもらうこと」)が入り込み、その事態の当事者への関わりと合わせて言語化する傾向が反映されていると述べている。

澤田(2007)は、この「てくれる」構文を、事象を捉える「認知主体」にとっての恩恵性を表す構文として認知言語学的な一般化を試みた。さらに、澤田(2009)では、「てくる」構文に関して、「心理的ダイクシス」という概念を導入し、「てくれる」構文もその一例だと見なししている。この概念によって、話し手(1人称)の領域に属するかそれ以外(2/3人称)の領域に属するかを表現し分けるという日本語の歴史的变化の一般的傾向に還元し、移動動詞「来る」と授与動詞「くれる」が、それぞれ「てくる」と「てくれる」構文へと文法化した現象と

して統一的に扱った。この考え方の背後には、日本語の1人称中心、2/3人称非中心という捉え方に着目した池上（2007）と共通認識があると思われる²⁾。

一方、語用論的な立場の研究として、日高（2011）を挙げておく。日高（2011）は、中世以降、「くれる（くる）」の受け手が話し手（1人称）に限定されるようになったという歴史的な事実を踏まえ、その要因をポライトネスの視点から次のように論じている。授受行為の場面において、与え手は恩恵を施すという上位の立場に置かれるため、与え手と受け手の間に立場上の上下関係が生じる。もし話し手が与え手になると、話し手が相手よりも上位であることを言語的に顕在化させてしまう。そこで、これを回避する手段として、「くれる」の場合、話し手と与え手とする用法が廃れ、話し手を常に受け手に置くという用法に限定されるようになった³⁾。この「くれる」の求心性動詞化と並行して、かつて「くれる」が担っていた話し手と与え手となる用法（遠心的方向性）は「やる」が担うことになり、この時点で現代につながる「くれる」と「やる」の語彙的対立が成立したのである。なお、「くれる」によってかつて表すことのできた遠心的方向性は諸方言で見られることが知られている（日高 2007, 2009, 2011）。

以上、本論文と関係の深い研究を概観してきた。日本語における歴史の変遷の過程で、「くれる」が求心性動詞となることで授与動詞に「くれる」と「やる」の対立が生じた。その背景として、池上（2006, 2007）や澤田（2007, 2009）のように、話し手領域と聞き手領域を言語的に区別する日本語の特徴に適った流れであるとする捉え方と、日高（2011）のように、話し手が上位になるのを避けるというポライトネスの観点からの動機づけがある。確かに、「くれる」の求心性動詞化は日本語の特徴に合致する以上、日本語にとって自然な言語変化であり、また、上下関係を重んずる日本文化の中では授与行為の場面での有効な言語的手段であったと考えられる。

これらを踏まえて、本研究では（4a）と（4b）に見られる容認性の差に注目したい。

- （4） a. 彼が私の好きな本を（買って）くれた。
- b. ??彼が私の嫌いな本を（買って）くれた。

（4）では、「くれる」の使用によって、話し手の「私」が「彼」よりも上位に位置することは回避されるためポライトネスの観点から問題はないはずである。しかし、（4b）は（4a）よりも容認性は低い。本研究では、この差は、授与される対象物に対して受け手（話し手）が感謝を感じられるかどうか起因すると考える。そして、「くれる」がコード化する感謝の感情に焦点を当て、*give* と対照させながら、「くれる」の求心性動詞化についての理解を深める。

ここで、具体的な考察に入る前に、（5）のような文脈でも「くれる」が出現可能であることに触れておきたい。（5）は、相手の行為などが話し手にとって迷惑であることを示すよう

な文脈である（この文脈を想定すれば（4b）の容認性は上がることになる）。

- (5) a. よくもだましてくれたな。
- b. 彼は取り返しのつかないことをしてくれた。

留意したいのは、(5)に伴う迷惑のニュアンスは、あくまで感謝の気持ちを前提とした「ありがた」迷惑だという点である。このことは、(6)との対照からも浮き彫りになる。

- (6) a. よくもだましたな。
- b. 彼に取り返しのつかないことをされた。

(6)の表現でも話し手が迷惑を受けたことは表されるが、(5)のありがた迷惑のニュアンスは薄れ、むしろ被害のニュアンスが前面に出る。こうしたことを考慮に入れ、本論文では、典型性の観点から、(4a)のような用法を「くれる」の基本的用法と捉え、そこからの派生として(5)のタイプを位置づけることにする。これは、迷惑の用法を「授受動詞が本来的に持つ「与益性・受益性」を逆手に取った、一種の皮肉表現」とする日高(2007:16)に従うものである。つまり、「くれる」には感謝の感情がコード化されており、それが字句通り使用されたのが(4a)、派生的に使用されたのが(5)の用法ということになる⁴⁾。

3. 授与動詞「くれる」の求心的方向性と主観的明証性

本節では、先行研究で明らかになっていることを踏まえ、授与動詞「くれる」が、移動動詞「来る」や感情述語「嬉しい」などといかなる点で共通し異なるかに注目する。具体的には、授与行為、求心的方向性と主観的明証性という観点に分けて考えると、表1のように、それぞれの主観的把握表現の諸特徴が明示的になる⁵⁾。

表1：主観的把握表現の特徴

	授受動詞「くれる」	移動動詞「来る」	感情述語「嬉しい」
授与行為	○	—	—
求心的方向性	○	○	—
主観的明証性	○	—	○

授与動詞「くれる」の意味に授与行為が関与するのは当然であるが、この表によれば、「くれる」にはさらに移動動詞「来る」の求心的方向性と、「嬉しい」などの感情述語の主観的明証性がコード化されている。以下では、求心的方向性と主観的明証性が「くれる」にコード化さ

れる根拠となる事実を見ていく。

3.1. 求心的方向性

求心的方向性とは話し手の方へと向う移動の方向性を、遠心的方向性とは話し手から離れていく動きのことを意味する。求心的方向性を表す移動動詞「来る」が本動詞として用いられるとき、人の移動であったり、人以外の移動であったりする。

- (7) a. 明日、両親が来る。
- b. もうすぐ締め切りが来る。

例えば、(7a)では、話し手の両親が話し手の方向へ物理的に移動することが含意され、(7b)では話し手の発話時点で締め切りの期日が迫っているという意味で、話し手への方向性を比喩的に示していると言える。

この求心的方向性を、先行研究でなされたように、授与動詞「くれる」に引きつけて考えると、本動詞「くれる」にも話し手への物の移動が関与していることが分かる。物の移動が関わる移動動詞「来る」との違いは、「くれる」の場合、物の移動が話し手以外の人物による授与行為に起因するという点である。本論文冒頭から観察してきたように、「くれる」は話し手以外への移動は表せず、その使用に関しては「やる」と相補分布をなす。つまり、移動動詞「来る」と「行く」の求心的方向性と遠心的方向性が、それぞれ授与動詞「くれる」と「やる」と求心的方向性と遠心的方向性に対応する。この平行性に注目すれば、移動動詞の使い分けが授与動詞でもなされるようになったと考えられる。実際、移動動詞の使い分けは、「くれる」と「やる」の分化に先行する (cf. 古川 1995)。

このように求心的方向性の観点から考えると、「くれる」の求心性動詞化が移動動詞である「来る」の求心的方向性と共通することが分かり、話し手領域と聞き手領域を区別するという日本語の特徴の1つに適っていることが捉えられる。変化の結果を見れば、確かに、「くれる」の求心性動詞化は日本語の一般的傾向に合致することが理解できるが、では、求心的方向性を獲得するように変化を遂げたのが数多くある動詞の中で「くれる」であった理由は何か。このことを考えるため、次に「くれる」のもう1つの特徴である主観的明証性に着目したい。

3.2. 主観的明証性

ここで言う主観的明証性とは、感覚や感情がその当事者（話し手）にしか感じられないという性質を意味する。痛さなどの感覚、悲しさや嬉しさなどの感情はその本人が感知するものであり、本人以外がそれらを共有することはない。日本語の特徴の1つとして、感情を表現する

際に、その感知主体が話し手のときと話し手以外のときで区別し人称制限として具現化することは、池上（2007）や日高（2007）などで述べられている通りである。次の日本語と英語の例を比較してみよう。

- (8) a. 私は嬉しい。
 b. 彼は {嬉しそうだ/*嬉しい}。
 (9) a. 私は外国へ行きたい。
 b. 彼は外国へ {行きたがっている/*行きたい}。
 (10) a. I am happy.
 b. He is happy.
 (11) a. I want to go abroad.
 b. He wants to go abroad.

日本語では、(8)(9)のように現在形の場合、すなわち発話時の感覚や感情を述べる際、話し手の場合は無標であるが、それ以外のときは「そうだ」「がる」「らしい」といった推量を表す語彙が必要となる。これに対して、(10)(11)のように、英語では人称に関わりなくすべて同じ述語形式で表現される。

本研究では、この種の主観的明証性と授与動詞「くれる」との関係性に注目する。ただし、これまで「くれる」の表す感情的側面が無視されてきたというわけではない。例えば、大江（1975：157-158）は、「受け取る人の側での与える人に対する「感謝」や「期待」のような主観的感情が含まれる」と述べ、山橋（1999：98）は、「(て) くれる」を利益や恩恵を感じることを表す表現であるとした上で、「他の異文化的価値体系とは異なる「利益・恩恵」という日本人に特有の感情に関わることを無視できない」と主張している。また、日高（2007：11）には、「授受動詞の表す授受行為の受け手は、対象物を受け入れ、ある種の感情（期待されるものとしては恩恵意識）を抱く存在として規定される」という記述が見られる。つまり、先行研究が「くれる」の感情的側面に気づいていないということを指摘するのがここでの目的ではない。この感情的側面を他の感情述語の持つ主観的明証性と関連づけることによって、「くれる」の求心性動詞化の背景を探るのが本研究の目的である。

ここで、「くれる」に関与する感情とはいかなるものか再確認しておく。「くれる」の先行研究の知見や「くれる」を用いた構文や他言語における *give* 相当の構文が「恩恵構文」（益岡 2007：50-54）や “benefactive constructions” (Shibatani 1996) と呼ばれて分析されていることから (Zúñiga and Kittilä 2010 にはこれまでの経緯と最新の研究が収録されている)、「くれる」に関わる感情は、利益や恩恵を受けることによって受け手（話し手）に生じる感謝の気持ちであ

ると考えるのが最も自然であろう。また、既に言及したが、授与行為によって授与される対象物のタイプを考えても、「くれる」の使用には感謝の気持ちが前提となっていると言える。

- (12) a. 彼が私の好きな本を（買って）くれた。（=(4a)）
b. ??彼が私の嫌いな本を（買って）くれた。（=(4b)）

(12a) では、授与される対象物は受け手（話し手）にとって好ましいものであるが、(12b) では好ましくないものである。(12a) に比べて (12b) は不自然に響くことから、「くれる」を使う際、「くれる」の授与行為で授与される対象物は受け手がありがたく思えるものでなければならないということが分かる。実際、感謝の気持ちを明示的に述べる「ありがたいことに」や「嬉しいことに」といった表現は (12a) のような文と問題なく共起する（山橋 1999）。なお、他の感情述語との違いは、「くれる」の表す感謝の念が授与行為によってもたらされるという点である。感謝の感情を表す述語「ありがたい」などは感謝という点で「くれる」の感情と共通するが、「ありがたい」の感謝は必ずしも授与行為に付随する感情というわけではない。

このように、恩恵の概念を感謝の感情と直接結びつけた理解の仕方によって、「くれる」と他の感情述語との共通性が見えてくる。重要なのは、この共通項が「くれる」の求心性動詞化の背景（動機）の1つとして考えられる点である。感情述語が主観的明証性を持つことは、感情主体が話し手のときと話し手以外のときとで言語表現上の違いとして顕在化することでもある。本論文のように、「くれる」と他の感情述語との共通性に注目することによって、感情主体が話し手であることに起因する主観的明証性の言語的特異性を「くれる」の求心性動詞化と関連づけられるようになる。授与行為に付随する感謝の念が「くれる」にコード化されるのに伴って、話し手（恩恵の受け手）しか感じられない感情を表現する専用形式として求心的方向性を持つ授与動詞「くれる」が成立したと考えられるのである。「くれる」の求心性動詞化は、同時に「くれる」と「やる」の分化を意味する。これは、他の感情述語に関して、感情主体が話し手のときに専用の言語形式を持ち、話し手以外のときと区別することと平行的に捉えられる。

3.3. 「くれる」と *give*

本節では、これまでの議論に基づき、次表のように日本語「くれる」を英語 *give* と対照させる。

表2：授与動詞「くれる」と *give* の特徴

	くれる	<i>give</i>
求心的方向性	○	—
主観的明証性	○	—
意味拡張	—	○

授与動詞である以上、授与行為に伴う対象物の移動を伴う点で両言語に変わりはない。しかし、表2で示したように、「くれる」が移動動詞の求心的方向性と感情述語の主観的明証性の特徴を持つのに対して、*give* はいずれによっても特徴づけられない。授与動詞のコード化の範囲が言語間で一致しないのである。言い換えれば、日本語では「くれる」という語彙を使うだけで、対象物が話し手へ移動したと話し手が抱く感謝の感情が含意されるが、英語では *give* を使用するだけでは、誰に対して対象物が移動したのかという情報や話し手が持つ感謝の感情は表現されない。

ここで、求心的方向性と主観的明証性のコード化における言語間のずれと両言語の授与動詞の使い方の相違を対応づける。*give* が求心的方向性を欠くことによって、論文冒頭で確認した日英語の人称制限の違いが現れる。英語では、受け手が誰であるかを伝えるためには受け手の人称に関係なく、二重目的語構文(“to give X Y”)もしくは与格構文(“to give Y to X”)によって受け手(X)を明示する必要がある。一方、主観的明証性に関しては、*give* に感謝の感情がコード化されていないため、恩恵のニュアンスは文脈から推論するか、言語的に明示化するのであれば *for me* などの語句を付加するしか手立てはない⁶⁾。

また、「くれる」が求心的方向性と主観的明証性を備えて「やる」と相補的に使用されるということは、日本語の授与動詞「くれる」「やる」は *give* よりも意味・機能が限定的であることを示す。言い換えれば、*give* の方がより一般的な授与の意味を持ち、その分、意味・機能拡張する可能性が大きいはずである。例えば、(13) の *give* の用法を考えてみよう。

- (13) a. This smell gave her a headache.
 b. This smell gave me a headache.

これまで見てきた授与動詞の基本的な用法では、授与される対象物(「本」など)が与え手から受け手に物理的に移動することが表される。しかし、(13) の “a headache” は、“this smell” から受け手へ移動するわけではない。そもそも “this smell” は無生物であるので頭痛のような生理的現象は持たない。(13) の用法は、主語相当のものがきっかけとなって、人にある種の感覚や感情などを引き起こすという使役的な用法と言える。こうした使役的なニュアンスは日

本語の授与動詞では確立していない⁷⁾。

- (14) a. ??このにおいは彼女に頭痛をやった。
b. ??このにおいは私に頭痛をくれた。

(14) の不自然さから明らかなように、(13) の用法を日本語の授与動詞によって対応づけることはできない。容認性を上げるためには、授与動詞を使わずに表現することになる。

- (15) a. このにおいで彼女は頭が痛くなった。
b. このにおいで私は頭が痛くなった。

英語では「頭痛」を引き起こすといった使役的な意味が *give* によって表されるのに対し、日本語では授与動詞の「くれる」「やる」ではなく、別の動詞や別の構文が選好される。言い換えれば、日本語の授与動詞は当該用法への意味・機能拡張をしていないのである。

ただし、「くれる」が全く拡張しないというわけではない。英語とは違った方向に意味変化を遂げていると言ってもよい。「くれる」が「てくれる」という補助動詞の形式で用いられるとき、話し手の感謝の対象は一般的な事態に対するものとなる。

- (16) a. 彼が本を買ってくれた。
b. 彼が道を教えてくれた。

(16 a) では、解釈の仕方によっては「本」が授与行為の対象物となりうるが、(16 b) では、対象物そのものが存在しないので文字通りの授与が関わる解釈は不可能である。その代り、「彼が道を教える」という事態に対する話し手の感謝の感情が表されることになる。つまり、「くれる」は、「てくれる」の形で恩恵標識として機能する。英語 *give* ではこのような文法的な機能を担う方向に意味拡張（変化）はしていない。

意味拡張に関連して、「てくれる」は依頼標識としての文法的機能も持ち、依頼標識として用いられる割合が高いことが知られている（荻野 2007；森 2010, 2011；など）。

- (17) a. 道を教えろ。
b. 道を教えてくれ。

例えば、(17 a) は道案内を強要する命令文であるが、(17 b) は依頼文となる。両者の違いが

「てくれる」という(16)で見た恩恵標識の命令形に由来することは明らかである。さらに、ポライトネスの観点からは、(18a)と(18b)の違いが興味深い。

- (18) a. 道を教えてください。
b. 道を教えてください。

(18a)は「てくれる」の尊敬表現で、主語に対する敬意が表される。しかし、(18b)のように命令形になると、尊敬語というよりはむしろ丁寧表現として機能する。(18a)では目上の者が文の主語となって目下の者がその恩恵を受けるという解釈のみ可能であるが、(18b)の命令形では、例えば、上司が部下に何かをしてもらいたいときでも使用できる。この意味で、「てください」は丁寧表現として機能しているだけである。これらの現象の背景には、森(2010, 2011)が明らかにしたように、近世以降、尊敬語「てくださる」の命令形が衰退する代わりに受益表現へと拡張するという歴史の変遷がある。

4. 関連分野

4.1. 「くれる」「来る」「たがる」の歴史の変遷

ここでは、本論文での議論が、実際の歴史の変遷と整合性があることを示しておく。古川(1995)や日高(2011)などで述べられているように、「くれる」は元来、求心的方向も遠心的方向も表す動詞であったが、時代と共に求心性動詞として機能するようになった。古川(1995)の調査から、求心性動詞としての「くれる」の用法は、鎌倉期に見られ始め、中世末期には確立したことが明らかとなっている。そこで、移動動詞「来る」が求心的方向性を示す時期、また、話し手と話し手以外の感情描写で感情述語の表現手段を区別し始める時期を先行研究や辞書の記述に基づいて確認する。

移動動詞に関して、小田(2007: 51)によれば、古代の移動動詞「来」には話し手以外への方向性を表す用法があった。このことから、当時、「来」は求心的方向性を示す動詞として確立していなかったと考えられるが、到着地に自分(話し手)がいる立場で述べた用法も存在すること(『大辞泉』)を考え合わせれば、話し手の方向に向かう求心的方向性が古代語「来」の段階で既に備わっていたとも解釈できる。また、感情述語については、Frellesvig(2010: 338)は、願望表現「たい」と「たがる」の使い分けがLate Middle Japanese(1200-1600)の時点で存在していたと述べ、『大辞泉』でも、鎌倉時代から「たがる」が用いられるようになったことが言及されている。感情述語の主観的明証性は鎌倉期以降であると言える。

求心性動詞「くれる」、移動動詞「来」、感情述語「たがる」のそれぞれの成立時期を整理すると、移動動詞が求心的方向性を獲得した時期(=古代)は、「くれる」がこの性質を獲得し

た時期（＝鎌倉期）よりも早く、一方、感情述語が主観的明証性を獲得した時期（＝鎌倉期）は、「くれる」がこの性質を獲得した時期（＝鎌倉期）とほぼ重なることになる。さらに細かく成立時期を特定する必要があるが、「くれる」の求心性動詞化が移動動詞の求心性動詞化よりも後に起こったこと、そして、「くれる」の主観的明証性が他の感情述語の主観的明証性を示すようになった時期とほぼ重なりうるということは言える。そして重要なのは、「くれる」の求心性動詞化は、それより以前に求心性動詞化していた移動動詞「来る」の求心的方向性と、「感謝」の感情をコード化した感情述語としての主観的明証性の反映である、とする本研究の立場と矛盾はしないという点である。

4.2. 社会文化的に見た恩

本研究では、恩（恵）が日本語の授与動詞「くれる」という語彙にコード化されているという見方に基づいて英語の授与動詞 *give* との違いを浮き彫りにした。特に恩恵に伴う感情的側面、すなわち感謝の感情に注目して「くれる」と他の感情述語との平行性を探ってきたが、ここでは、恩の社会文化的側面の考察を試みる。恩は普遍的な概念と言えるのであろうか。

日本文化における恩の論考として Benedict (1946) がある。これによれば、恩の概念は日本文化特有のものであり、特徴として、次の2点に注目したい。

- (19) a. In Japanese usage it [=恩 (筆者注)] is translated into English by a whole series of words from 'obligations' and 'loyalty' to 'kindness' and 'love,' but these words distort its meaning.

(Benedict 1946 : 99)

「日本語の慣用ではこの言葉は *obligation*, *loyalty* から *kindness* や *love* にいたる、種々さまざまな言葉に英訳されるが、これらの言葉はいずれももとの言葉の意味をゆがめている。」

(長谷川 2005 : 122)

- b. On is in all its uses a load, an indebtedness, a burden, which one carries as best one may. A man receives on from a superior and the act of accepting an on from any man not definitely one's superior or at least one's equal gives one an uncomfortable sense of inferiority.

(ibid.)

「それらの用法の全部に通じる意味は、人ができるだけ力を出して背負う負担、債務、重荷である。人は目上の者から恩を受ける。そして、目上、あるいは少なくとも自分と同等であることの明らかな人間以外の人から恩を受ける行為は、不愉快な劣等感を与える。」

(ibid. : 123)

(19a)から分かるのは、恩は他言語における概念と一対一対応するようなものではなく、「義務」や「忠誠」、「親切」や「愛」から成る複合的な概念で、日本文化固有の社会文化的概念であるということである。なお、これらを受け手の側から捉えたのが本研究で注目した感謝の感情ということになる。(19b)は、上下関係を前提にしながら、恩は上位の者から下位の者へ授与されるものとして認識されていることを示す。こうした上から下への方向性が英語の「義務」や「親切」などで前提となっていないということからも恩というものがいかに日本文化固有の概念であるかがうかがえる。(20)は『日本国語大辞典(第二版)』の「恩」の定義である。

(20) 目上の人から受ける感謝すべき行為。めぐみ。なさけ・いつくしみ。

この定義からも複合的な概念であることと上下関係を前提にしていることが理解できる。

ここで、文化と言語の関連を扱う民族統語論(ethnosyntax)に触れておく。Enfield(2002: 4)の定義によれば、民族統語論とは、文化的知識・態度・慣習と語彙・文法との関連を研究する分野である。この理論的枠組みによって、Newman(2002)は、日本社会における上下関係の社会秩序を反映する例として、授与に関する語彙選択について分析している。具体的には、「くれる」に見られる話し手への方向性(求心的方向性)は、与え手と受け手との間の相対的な上下関係に基づくとした。これは、「くれる」の受け手を話し手(自分)に限ることで自分を相手よりも上位に置かないようにするという日高(2007)のポライトネスの観点からの考察に通じるものである。

以上の考察をまとめると、複合的な恩の概念(= (19a))に伴う感謝という感情的側面に着目したのが本研究だとすれば、日本における社会秩序・ポライトネスを考慮するNewman(2002)や日高(2007)は、恩に関わる上下関係の側面(= (19b))に注目したものだと言える。汎言語的に、授与動詞は*give*のように未分化であるのが「標準」であり、日本語のように語彙的に「くれる」と「やる」に分化している言語は特異であるとされる(山田 2011)⁸⁾。この種の言語的な特異性は、日本文化における恩の概念の特異性と密接に結びついていると考えられる。

5. おわりに

本論文では、日本語の授与動詞「くれる」の求心的方向性の特徴を中心に、通言語的に珍しい「くれる」と「やる」の語彙的対立について、共時的、通時的、社会文化的視点から考察を行った。先行研究では、「くれる」と「やる」の分化の動機として、話し手領域に向かう行為とそれ以外の領域に向かう行為とで表現を使い分けるといった日本語の特徴を踏まえて認知言語学的に説明を試みる方向と、授与行為に伴う立場上の上下関係を踏まえて、ポライトネスの観

点から語用論的に「くれる」の求心性動詞化の要因を探る方向がある。いずれも現代日本語の授与動詞の語彙体系を理解するためには欠かせない理論的視座であるが、本研究では、移動動詞の求心的方向性と感情述語の主観的明証性の特徴の他、社会文化的な要因をさらに掘り下げ、日本文化における恩の概念の特異性と「くれる」の持つ言語的特異性ととの関連を民族統語論の観点から探った。本研究によって、「くれる」には対象物の話し手への移動の他にその授与行為に伴う話し手の感謝の感情が語彙的にコード化されているが、英語の授与動詞 *give* には対象物の移動のみがコード化されているという違いが浮き彫りになった。そして、こうした日英語授与動詞におけるコード化のずれが「くれる」と *give* の用法の違いを動機づけるのである。

今後は、本研究で行った「くれる」の分析を踏まえ、動詞のモダリティの意味や「てくれる」構文への拡張について考察を深めたい。感謝という感情は、授与行為の事態に対する話し手の心的態度であることを考えると、「くれる」にはモダリティ的な意味がコード化されていることになる。本研究に基づく授与動詞の日英語対照研究によって、動詞意味論とモダリティ研究への関連性が明らかになる。また、英語の *give* とは拡張の仕方が異なることが分かったので、意味変化（拡張）における元の語彙項目の働きを理解する手掛かりとなるはずである。さらに、日本語の場合、「てくれる」が恩恵構文となったり、「てくれ」という命令形になったとき依頼標識として機能するようになったりに言及した。文法化の進捗度の観点から捉えれば、「くれる」「てくれる」「てくれ」という一連の変化のプロセスを共時的、通時的、社会文化的視点から包括的に理解できるようになる。

謝辞

本稿は2014年2月5-6日、Eötvös Loránd University（ブダペスト）で開催された大会“Socio-cultural Factors in Style”での口頭発表の内容の一部を修正して発展させたものである。本稿を準備するにあたり、査読者の先生から数多くの有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝申し上げる。なお、本稿に残された不備はすべて筆者のものである。

注

- 1) 本論文では、文法性の判断として、「*」は非文法的、「??」は文法的に間違いとは言えないが語用論的には不自然であることを表す。
- 2) 授与動詞「(て)やる」「(て)くれる」に関して、澤田(2014)はShibatani(1996)を発展させながら、韓国語、マラーティー語、中国語と比較対照して日本語の授与動詞構文のパターンを類型論的に明らかにしている。
- 3) 大江(1975:183-185)によれば、行為者が被行為者に有益なことをなし得ることは、前者が後者より高いということを含意するので、「てくれる」を用いることによって「私」を低めて相手を高めるのは日本語の謙譲の精神にあう、としている。

- 4) 山田 (2011) は、(5) のような用法を「非恩恵表現」とした上で、(4a) や (5) の「てくれる」構文の原初的意味を「受(授) 影性」とする。「受(授) 影性」の観点からの「(て) くれる」の考察、および (5) の用法に関するより詳しい考察は今後の課題としたい。
- 5) 大江 (1975) や池上 (2007) も、授与動詞を移動動詞や感情述語と同時に考察しているが、共時的な考察が中心である。本論文の特徴は、共時的な視点に加えて歴史的な視点から、これら主観的把握表現の通時的な関連性を探る (4.1節) とともに、民族統語論の観点からも恩という日本文化における社会文化的背景を考慮に入れる (4.2節) 点にある。
- 6) 英語の授与動詞 *give* が *for* と格構文をとるということではない。次の例文は「てくれる」の形式だが、与えられた英語訳から、*for me* によって恩恵のニュアンスが加わることが分かる。
- (i) *Kare ni agete kuremasen ka?*
 ‘Would (lit. won’t) you give [it] to him for me?’
 (Jorden and Noda 1988 : 114 ; ローマ字表記は一部改変)
- 7) 日本語の授与動詞に使役的用法が全くないというわけではない。例えば、「勇気」「希望」「感動」など前向きなことを表すときには「くれる」と共起しやすいように思われる。
- (i) a. この音楽は私に勇気をくれた。
 b. この音楽で私は勇気がわいた。
- 8) Bhat (1999 : 84) によると、マオ・ナガ語の授与動詞の命令文では、受け手が話し手のときは *-ka* を動詞に付加し、話し手以外のときは *-ha* を付加する。当該言語では、授与動詞の語彙自体は未分化だが、接辞レベルでは分化していることになる。

参考文献

- Benedict, Ruth (1946) *The chrysanthemum and the sword : Patterns of Japanese culture*. Boston and New York : Houghton Mifflin Company. (長谷川松治訳 (2005) 『菊と刀—日本文化の型』東京：講談社。)
- Bhat, D. N. S. (1999) *The prominence of tense, aspect and mood*. Amsterdam and New York : John Benjamins.
- Enfield, Nicholas (2002) Ethnosyntax : Introduction. In Nicholas Enfield (ed.) *Ethnosyntax : Explorations in grammar and culture*, 3–30, Oxford : Oxford University Press.
- Frellesvig, Bjarke (2010) *A history of the Japanese language*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 古川俊雄 (1995) 「授受動詞「くれる」「やる」の史的変遷」『広島大学教育学部紀要』44, 193-200.
- 日高水穂 (2007) 『授与動詞の対照方言学的研究』東京：ひつじ書房。
- 日高水穂 (2009) 「敬語と授与動詞の運用に関わる現場性制約—日本語諸方言の対照研究の観点から—」『日本語文法』9(2), 3-18.
- 日高水穂 (2011) 「やりもらい表現の発達段階と地理的分布」『日本語学』30(11), 16-27.
- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』東京：日本放送出版協会。
- 池上嘉彦 (2007) 『日本語と日本語論』東京：筑摩書房。
- Jorden, Eleanor and Mari Noda (1988) *Japanese : The spoken language (Part 2)*. New Haven and London : Yale University Press.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』東京：大修館書店。
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』東京：くろしお出版。
- 森勇太 (2010) 「行為指示表現の歴史の変遷」『日本語の研究』6 (2), 78-92.
- 森勇太 (2011) 「やりもらい表現の歴史」『日本語学』30(11), 28-37.

- Newman, John (2002) Culture, cognition, and the grammar of 'give' clauses. In Nicholas Enfield (ed.) *Ethnosyntax : Explorations in grammar and culture*, 74–95, Oxford : Oxford University Press.
- 小田勝 (2007) 『古代日本語文法』 東京：おうふう.
- 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』 東京：南雲堂.
- 荻野千砂子 (2007) 「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』 3(3), 1-16.
- 澤田淳 (2007) 「日本語の授受動詞が表す恩恵性の本質—「てくれる」構文の受益者を中心として」『日本語文法』 7 (2), 83-100.
- 澤田淳 (2009) 「移動動詞「来る」の文法化と方向づけ機能—「場所ダイクシス」から「心理的ダイクシス」へ—」『語用論研究』 11, 1-20.
- 澤田淳 (2014) 「日本語の授与動詞構文の構文パターンの類型化—他言語との比較対照と合わせて—」『言語研究』 145, 27-60.
- Shibatani, Masayoshi (1996) Applicatives and benefactives : A cognitive account. In Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson (eds.) *Grammatical constructions : Their form and meaning*, 157–194, Oxford : Oxford University Press.
- 山田敏弘 (2011) 「類型論的に見た日本語の「やりもらい」表現」『日本語学』 30(11), 4-14.
- 山橋幸子 (1999) 「受益表現「(ーて) くれる」の機能と日本語教育」『比較文化論叢』 4, 79-96.
- Zúñiga, Fernando and Seppo Kittilä (2010) *Benefactives and malefactives : Typological perspectives and case studies*. Amsterdam and Philadelphia : John Benjamins.

